

## NGO 海外研修報告書

派遣国：タイランド 所属：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

研修期間：2011/2/28~3/25 氏名：西山 雄大

私はこの研修に参加するにあたり3つの目標を立てた。1点目は、大学院卒業後仕事として教育開発の活動に携わる際、NGO (SVA) で働くことを自分がどのように感じるか、2点目はSVA タイランドの活動を理解すること、3点目はSVA の活動に参加して、効果的な組織運営を考察すること、である。

### 1. SVA (NGO) で教育開発の活動に携わりどのように感じるか

#### (1) 現地語 (タイ語) の重要性

予想以上に現地語 (タイ語) が重要であると感じた。私は東京でも、タイ語学校に1カ月通っていたので、基本的なことは相手に伝えられると思っていた。しかし、SVA は国際機関などよりもより現場に密着した支援を行っているので、スラムの図書館、パヤオ県の学生寮、サンスティック村で、子供達や住民、スタッフと会話する時に会話で苦労した。バスに乗ることさえ苦労した。「英語は極力使わない」と自分の中でルールを決め、どうしても通じない時は、外出先では辞書、オフィスではグーグルの翻訳機能で会話したりもした。タイ語を話せて初めてタイコミュニティに溶け込めると感じた。

#### (2) 現場に近い活動が可能

村で、奨学金を希望する家庭を訪問し、インタビューを実施した。現場で支援を求めている人の生の声を聞く体験は重要である。子供の学校へ行きたいという思い、親の子供への期待を間近で感じる事が出来た。SVA のオフィスがクロントーイというスラムにある。ここには日本だけでなく多くの海外のNGO が活動を行っている。しかし、オフィスの周りには貧困で未だにあふれている。GDP で見れば経済成長著しいタイだが、一方でタイ国内の貧富の差が拡大しているという現実にはジレンマを感じた。

#### (3) 体力・気力・生命力の重要性

バンコクのオフィスから地方へはバス、車で長時間移動した。生まれて初めて1日に10時間近くバスに乗った。またバスが故障して、2時間太陽の日差しの中待機したこともあった。また、沼地の中で車が動かなくなり後ろから皆で押したり、雨で倒れた木が道をふさいで2時間立ち往生したこともあった。まさにこのような環境の中でサバイバルする力が必要であると感じた。

### 2. SVA タイランドの活動を理解する

この1ヶ月間で、SVA の行っているコミュニティ図書館活動、保育士対象の研修会、移

動図書館活動、学生寮の運営事業、奨学金事業などを見て理解することが出来た。若いうちにこのような現場を体験することは、その後このような教育開発の仕事をしていく上で大切なモチベーションの源泉となる。子どもにとって安心して過ごせる場所、人の存在の重要性、ハード面以上にソフト面での支援を重視し、地域に入り込み働きかける形をとる SVA の活動の重要性を感じた。アクセスが困難な地域で子供達に良質の本に触れる機会の提供をすることも大切である。また、山岳少数民族への支援も重要であり、特に国籍、社会福祉の問題、独自の文化、風習、言語、宗教への対応は緊急を要する。タイでは、義務教育 9 年間、無料基礎教育 12 年間が施行ということになっているものの、村の人からお話を聞いてみると現実はどうも違うようであった。そこにこそ、SVA の所学金事業により皆が教育を受ける機会の提供をすることの意義があるのではないだろうか。

### 3. SVA の活動に参加して、効果的な組織運営を考察する

SVA タイランドの自立に向けたハンドオーバーを可能とするには、SVA に共感するタイの大学卒の優秀なスタッフの確保が重要なのではないかと感じた。そのための一つの施策は、SVA とタイの大学がうまく連携することではないだろうか。具体的には、SVA 職員が大学の講義へ参加する、大学、SVA 間の施設・教材の提供する、タイの大学生をボランティア、インターンとして受入れる、タイの大学教員を講師として SVA に受け入れる、などが考えられる。それにより、SVA の社会的信頼、知名度の向上も期待出来る。また SVA とタイの大学がうまく連携を行うためには、SVA とタイの大学のニーズ・課題・強み・弱みなどを把握する必要があるだろう。以下その詳細である。

#### 「優秀な大学生スタッフの獲得」

背景：・SVA の人的資源、予算の限界枠の限界

- ・SVA の自立支援、担い手の育成
- ・タイの高等教育（大学卒人材）と労働市場のミスマッチ。
- ・タイの高い経済成長率とタイ国内の格差の拡大というジレンマ
- ・アメリカでは NGO が人気就職先上位に（2008 nikkei BPnet）

例) 2 年間アフリカや南米などに行って現地で英語や技術を指導するピースコープが 5 位、貧困地区にある公立の学力底辺小中校で一定期間教師になるというプログラムを行うティーチ・フォー・アメリカ (TFA) が 10 位

- ・日本でも社会起業家を目指す若者が増加。企業の CSR の有無を就職の判断材料に増加する大学生の増加。特に 2007 年のリーマンショック以降。

## プロジェクト名

SVA ハンドオーバーのためのスタッフ獲得プロジェクト

## 上位目標

SVA タイランドのハンドオーバーが可能となる

## プロジェクト目標と指標

SVA に共感する大学卒の優秀なスタッフが入ってくる

指標：3年以内に〇〇人組織に入る

## 成果と活動

### 成果

1. SVA と大学が連携するようになる

### 活動

- 1.1 SVA 職員が大学の講義へ講師として参加する
- 1.2 大学、SVA 間の施設・教材の提供
- 1.3 タイの大学生をボランティア、インターンとして受入れる
- 1.4 タイの大学生の現場訪問・調査の受け入れ
- 1.5 タイの大学教員を講師として SVA に受け入れる（SVA の社会的信頼、知名度の向上）

### 指標

- 1.2.1 大学教員を通じて、半年に1度大学施設をセミナー、研修、会議、報告会の場として確保する  
⇒・SVA の広報啓蒙活動、支援者へのアカウントビリティーの確保  
・大学生が身近に NGO を身近に触れる機会の確保
- 1.3.1 タイの大学〇〇校とインターンプログラムを単位科目として認定契約を結ぶ

## 外部条件

- ・タイ人の自助の意識とコミュニティ活動への市民参加度は？
- ・タイの大学のゲストレクチャー制度は発達しているか？
- ・タイの NGO の社会的認知度、地位は？
- ・タイの大学関係者の国際協力事業への参加、関心度は？

【SVA とタイ大学のニーズ・課題・強み・弱み】

	タイの大学	SVA (NGO)
ニーズ	どのようなニーズがあるのか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現場職員の人材育成</li> <li>・ 将来の人材育成</li> <li>・ 政策提言能力の強化</li> <li>・ 社会的信頼、認知度⇒ファンドレイジング</li> <li>・ 研究・調査の強化</li> <li>・ タイの政策へ影響を与える事業実施</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人材の育成</li> <li>・ よりよいタイ国内の状況改善</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人材の需給バランス</li> </ul>	
強み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 社会的信頼（ファンドレイジング時）</li> <li>・ 専門性</li> <li>・ 国際的ネットワーク（例：チュラロコーン大卒）</li> <li>・ 科学的研究、調査、分析能力</li> <li>・ 持続可能性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 草の根開発</li> <li>・ 現地、現場好感度</li> <li>・ 現地情報収集力</li> </ul>
弱み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教育内容と実践のコネクションの欠如</li> <li>・ 高等教育と労働市場のミスマッチ（末廣 2009）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 持続可能性</li> <li>・ 社会的認知度、信頼度</li> <li>・ 財政的基盤</li> <li>・ 狭い人材の幅、職員数の不足</li> <li>・ 政策影響力</li> <li>・ 規模拡大</li> </ul>

以上 3 点、大学院卒業後仕事として教育開発の活動に携わる際、NGO (SVA) で働くことを自分がどのように感じるか、SVA タイランドの活動を理解する、SVA の活動に参加して、効果的な組織運営を考察する、がこの研修が達成したいと思っていた目標であり、自分なりの答えを見つけることが出来たと感じる。

## Reference

末廣昭『タイ 中進国の模索』岩波新書, 2009

八木沢克昌『アジア、熱き希望の大地』著悠々社,1997

「NGO と大学の連携協力による新たな国際教育協力活動の模索」『広島大学教育開発国際協力研究センター『国際教育協力論集』第9巻 第2号』2006年

『2008-2010年度 事業計画』SVA タイ事務所プレゼン